鉢多羅山若王寺釈迦院と庶民信仰

豊　島　修

はじめに

大阪府池田市鉢塚三丁目（旧摂津国豊島郡才田村）に位置する釈迦院は、現在高野山真言宗に属し、鉢多羅山若王寺と号して、摂津国八十八ヶ所霊場の第五十七番札所として存在している。山内の本堂には本尊釈迦如来と弘法大師像が安置され、本堂前の修行大師像の前には、現住職婦人が四国八十八ヶ所札所を巡拝して戴いてきたお砂を埋め、巡拝の意をこめるお砂踏み、あるいは厄神殿には八幡神と愛染明王、延命地蔵の三体を厄神明王として祀っている。地元では「尊鉢厄神」としてよく知られ、毎年一月十八日・十九日の「厄除開運厄神大祭」（大般若経転読・柴灯大護摩修行）には、池田市はもとより、近隣の豊中市、箕面市、川西市および大阪市内から厄年の人々をはじめ、開運・家内安全などを祈願する多くの老若男女の参詣で賑っている。

このように若王寺釈迦院は、摂津地域の霊場寺院の一つとして、また同寺の厄神明王に対する信仰は、庶民信仰の本質を究明するうえで興味深い問題があるように思われる。そこで以下、若王寺釈迦院の霊場寺院としての性格および厄神信仰について、若干の記録と伝承資料を基にして検討し、摂津地域の庶民信仰研究の一助にしたいと思う。

一

まず最初に、若王寺釈迦院の所在地である鉢塚にふれ、つぎに釈迦院の寺歴について検討してみよう。

鉢塚は現池田市の南東に位置し、北には五月山連山が東

西に走って肥沃な台地が南に広がっている。この台地と平地とが接するところに鉢塚がある。この鉢塚近辺にある寺社としては若王寺釈迦院のほか、おなじ摂津国八十八ヶ所霊場第五十八番の一乗院（高野山真言宗）と五社神社があり、五社神社の背後には鉢塚古墳が営まれていた。また鉢塚古墳の墳丘盛土中から、昭和三十九年に経塚が出土したことでもよく知られている。

当地域の歴史的状況は、古代の池田が為奈氏をはじめとする渡来系氏族の蟠居した地域で、その宗教についても「氏族的結合の中核として氏神信仰」のほか、渡来人に関係深い「諸々の伝承が絡み合い複雑にして疑義の多い縁起説話[1]」がうまれている。とくに池田の歴史的発達を考えるうえで、密接且つ不離の関係にあるといわれる伊居太神社（池田山腹に鎮座）に関する伝承[2]が注意されている。

中世の池田は、国人池田氏が当地域に勢力を誇ったため、文化や宗教も池田氏およびその一門・家臣団を中心として、「氏寺ないし旦那寺を創建する風潮[3]」が発生し、その宗教的活動に注目するものが多いといわれる。

当地域の近世は、慶長十年の『摂津国絵図』に「尊鉢村・出在家村」とみえる出在家村（才田村）に比定されている[4]。村名は天和三年ころの『摂津国御料私料村高帳[5]』にみえて、高三〇〇石余で幕府領とある。これは延宝七年の検地によって、尊鉢村の旗本中山猪右衛門・同太田次郎左衛門の相給地から幕府領となり、以後幕末まで続いている。

つぎに若王寺釈迦院の寺歴については、文献の欠如により確かなことは指摘しがたい。しかし元禄十四年の『摂陽群談』に、「釈迦院　同郡才田村にあり。当寺伝来の宝物、仏在世の鉄鉢は、当荘の窟より出たり。因って院名釈迦院と号し、地名尊鉢と号す。真言僧守レ之」とある。これによると、同寺の西南約一〇〇メートルに位置する五社神社の背後にある「鉢塚古墳」から出土したという如来在世の鉄鉢（現釈迦院蔵）にちなんで、鉢多羅山若王寺釈迦院と号し、当地域を尊鉢と名付けたという。この由来伝承は『大阪府誌』『大阪府史』『池田市史』などにも採用されている。

寺伝では、神功皇后が大陸からもち来った仏舎利・多羅・宝鉢を、仲哀天皇のとき、秦始皇帝の後裔という功満王が石窟を築き納めた。その後、行基が霊夢によりこの石窟から仏舎利を掘り出し、聖武天皇の勅命によって若王寺（のちの釈迦院）を建立し、鉢多羅山若王寺釈迦院と号したことに始まるという。鉢塚古墳は六世紀後半の上円下方墳といわれる[6]。巨大な横穴式石窟として知られ、石室の全長は一四メートル、玄室の高さは約五メートルで、玄室の

高さでは大阪府下で最大である。現在玄室の奥壁に接して鎌倉時代の十三重石塔、塔の左右には同時代の不動明王の板碑と地蔵尊がそれぞれ安置されている。[7] さらに先にふれたごとく、昭和三十九年にはこの古墳の墳丘盛土中から経塚が発見されている。この鉢塚古墳上の経塚の出土状況、経塚の構造、出土遺物の種類などについては、すでに富田好久氏の報告[8]に詳しく、また前掲『池田市史』（史料編）にも詳細に記録されている。

この石室内の十三重石塔や墳丘に営まれていた経塚を検討することは、釈迦院の前身と考えられる中世の若王寺を考察するうえで重要な手掛かりとなるものである。そこでまず、この問題について先記富田好久氏の論考を参照しつつ検討してみたい。

鉢塚古墳は古墳の形式などから、古墳時代後期のものと推定されているが、この石室の内部に安置されている十三重石塔は、高さ五メートルに近く、後補した相輪のほかは元のままである。塔身には薄く彫り沈めた月輪の中へ正面（南）は宝生如来、背面（北）は不空成就、左側（西）は弥勒、右側（東）は阿閦のいわゆる金剛界四仏の種子を配している。また塔の左には不動種子の板碑、右には地蔵の立像が添えられ、いずれも鎌倉時代のものと考えられている。右の石塔類が鉢塚古墳内に祀られた時代には、石室内が山岳宗教者・修験の徒の信仰の聖地となっていたことが容易に察知されよう。

そこでこの鉢塚古墳がいつごろ開かれ、十三重石塔類を入れたのか、また経塚との関係などの問題が生じるのである。このうち前者については、鎌倉時代に相州鎌倉で盛んであった「やぐら」を真似て、当地域でも同時代に開かれて入れられたという説と、どこかにあった石層類を室町時代以後に入れられたとする二説があり、現在、前者の鎌倉時代説が有力である。[9] それはまた、経塚の造営時期とも関わる問題である。経塚は出土遺物から経巻を失っているものの、容器をはじめとして、供養した祭器や奉賽の財物と考えられる遺物も伴出している。そして経塚の形状、遺物についての各年代の考察から、遺物の多くは平安時代から鎌倉時代のものが大部分であり、室町時代には下らないので、この経塚の造営時期を鎌倉時代と推定されたのである。しかも富田氏は十三重石塔の造立背景に、鎌倉時代に当地域の熊野信仰の流布を想定されているが、その実態内容や十三重石塔類の造立者などの問題についてはふれられず、慎重を期しておられる。

周知のように、平安時代以降密教の流行によって、山岳

修行者による霊山霊場での修行が盛行し、中央の吉野金峰山や熊野三山をはじめ、比叡山・高野山・鞍馬山から、羽黒山・日光男体山・英彦山・求菩提山などの地域霊山で経塚が営まれ、その遺跡・遺物の出土品についてもよく知られている。これら修験系経塚の特徴は、わが国古来の「巨石信仰と弥勒下生信仰、陰陽思想」などの習合によって形成されているといわれる。[10] また熊野那智経塚遺跡からは仏像をはじめとして、小塔・密教大壇関係仏具などが発見されており、埋経に際して「密教大壇」を築き、「荘厳な修法と埋納供養」[11]が行われたとみられる。さらに遺物も観音菩薩・薬師仏・阿弥陀仏をはじめ、金剛界大日如来・金剛界四菩薩・不動明王などのほか、密教大壇具を構成する仏具類などもみられる。同熊野新宮経塚には経塚の地上標識としての板碑などが造立されており、[12] 平安後期から中世には、修験道の霊場寺院の境内に宝塔・宝篋印塔・五輪塔・板碑などが造立される場合も多い。[13]

翻って五社神社の経塚の場合は、鉢塚古墳の墳丘に営まれていたが、この経塚の造営時期を鎌倉時代とするならば、おそらく熊野系の修験によってこのころ古墳が開かれ、石塔類が石室内に祀られて、後述する「窟籠り（いわやごも）」の修行の聖地として、即身成仏や「生まれ代わり」の宗教儀礼が行われていたのではなかったかと推測される。南北朝時代に若王寺は摂津国の熊野信仰の一拠点であり、また熊野先達として当国の檀那を熊野参詣に先導していたことは、『米良文書一』[14]にみえている。嘉慶三年三月十二日の「旦那売券」に、

売券状

合代拾六貫文者、

右件之旦那ハ、本宮般若寺之的場将監重代之旦那たるニよって、那智色河白川善阿ニ売渡處実正也、（中略）

但、たんなの在所ハつの国手嶋郡尊八若王寺（豊）、ひき旦那（傍点筆者）さゝたの一そく地家共、（下）并栄向寺の引旦那忠のゐん塩（中カ）河之一族地家共、同池田之一族地家共ニ相違あるへからす候、（後略）

嘉慶三年己巳三月十二日

本宮般若寺

将監頼方（花押）

とあり、若王寺は熊野権現[15]を祀る熊野先達として、当地の国人笹田氏一族とその地下衆を在地の有力な旦那と定めて、熊野参詣に案内していた。すなわち若王寺は、このころ当地域の国人とその地下衆を檀那とする特定の師檀関係が結ばれていたのである。

管見では右の檀那売券を若王寺の文献上の初見として、

室町時代の「米良文書」[16]にも散見するが、その起源は前述したごとく鎌倉時代まで遡るものであろう。そして鎌倉時代の経塚の目的は、その多くが死者の「追善供養」のために埋納されたといわれるが[17]、むしろ写経と埋経の宗教的実践は滅罪が目的であった。おそらく鉢塚古墳上の経塚も死者の滅罪と供養の目的のために営まれ、石窟は熊野信仰を担う窟籠りの山岳宗教者・修行者の聖地として、正灌頂などの即身成仏や擬死再生儀礼が行われたのであろう。熊野修験や山岳修行者による窟籠りの宗教儀礼については、現在伝承すらなく不明に帰しているが、修験道ではすでに奈良時代もしくはそれ以前から、山岳修行者が窟や巌を礼拝対象として巌窟に籠ったことは、奈良東山の地獄谷にある洞窟と線刻磨崖仏、弥勒磨崖仏（磨崖像）で知られる笠置山その他に実例がある。『撰集抄』[18]巻八には、貴族出身の山伏行尊が大峯山の秘所といわれる「笙の窟」（自然洞窟）で、三年の山籠り（千日山籠り）をしたことが記してあり、『本朝法華験記』巻中の「陽勝仙人伝」[19]にも、すでに延喜年中に、ここに籠った山伏のいたことがみえている。さらに中世にはこのような巌窟に籠り、そこで正灌頂などの即身成仏の儀礼があったり、「生まれ代わり」の擬死再生儀礼が行われたことは、すでに先学の研究[20]に詳しい。

時代は降るが、京都大原の古知谷には、そこで入定したという近世初頭の弾誓上人の入定窟がある。『弾誓上人絵詞伝』上巻（『浄土宗全書』十七所収）によれば、弾誓は厳しい洞窟修行の結果、阿弥陀如来になった自覚を得、その後「十方西清王、法国光明満正、弾誓阿弥陀仏」と名乗ったという。これは弾誓の宗教が「弥陀・即身成仏」であり、「修験道と浄土教が結合した自然宗教」[21]であると指摘されている。その意味で弾誓の修行中における苦行と精進、木食と巌籠りの生涯は大いに注目されるが、こうした洞窟信仰や宗教儀礼が熊野信仰の流布した鎌倉時代に、鉢塚古墳の石室内でも行われていたと推測される。それが不明に帰したのは熊野信仰の衰退を背景にして、若王寺（のちの釈迦院）が真言宗化したためと考えられる。そして釈迦院や一乗院は、つぎに述べるように若王寺が真言宗化する以前まで、若王寺一山の塔頭の一坊であったものと思われる。

二

若王寺一山は、戦国時代に織田信長の兵火に罹り焼失したが、天正十七年に伝誉上人（釈迦院の中興開山）が再興し、創建当時より奉祀してきた釈迦如来を本尊とする若王寺東の坊を釈迦院と号して、若王寺一山の命脈を継承した

と伝える。しかし中世における若王寺の本尊については異論があり、現一乗院蔵の「雨宝童子」（現在「融通尊」という）が旧若王寺の本尊であったと推測されている。[22] また記録のうえからも、近世中期ころまで若王寺釈迦院の本尊は十一面観音であり、釈迦如来ではない。たとえば正徳三年刊の『和漢三才図会』（下）に、「多羅山若王寺　在尊鉢村本尊十一面観音　行基菩薩建立」とある。また享保十五年の「釈迦院宝物目録」[23]（釈迦院文書）にも、

一　本堂十一面観音　木造御長壱尺三寸六分。但し座像。座後光三尺壱寸六分。行基作。同脇立行基作。行基并作。

一　本堂脇立・毘沙門　不動。行基作。行基作。長弐尺二寸一分。座後光六尺。但し、重座。船後光聖徳太子作。

一　木像釈迦如来

とみえて、いずれも釈迦院の本尊は十一面観音である。降って元文四年の文書[24]にも、「一　本堂十一面観音　脇立不動、毘沙門、三尊共行基之作」とあり、同文書は続けて釈迦如来が「岩家本尊」であったと記している。

これはおそらく享保二十年二月、同寺の第九世来賢法印[25]が宝鏡寺宮の池田監物から「鉢多羅山」の山号を賜ったときを境にして、釈迦院の本尊は十一面観音から釈迦牟尼仏に代えられたものと思われる。宝鏡寺宮と釈迦院の関係や、釈迦院がどうしてこのころ本尊を代えたのかは不明であるが、来賢法印のころに釈迦院一山が整備されたのではなかったか。その詳細については、なお今後に残された課題であるが、そうとすればこのころには、本寺を高野山西禅院とする本末関係も成立していたであろう。

また既述したように、中世に若王寺が別当寺であった五社神社（元熊野権現宮）は、右にふれた釈迦院の中興伝誉上人が再興し、近世には若王寺釈迦院が別当寺として奉祀した。五社神社蔵の安永元年と推定される「棟札」[26]に、「別当多羅山若王寺釈迦院現住浄戒」（裏面）とみえ、その表面には大日如来の梵字が記されている。真言宗寺院の管理する村鎮守として、春秋二期の祭礼などに釈迦院住職が奉仕していた。そして同鎮守の氏子は、当時、釈迦院の存する才田および尊鉢両村であった（「棟札」）。

その後、釈迦院は天保十一年に再び堂宇を焼失したが、幕末の慶応元年、歓浄上人によって再興され今日に至っている。

三

以上は、これまで断片的に知られていた若王寺釈迦院の寺歴について考察してきたが、こうした寺歴を有する釈迦院が、摂津地域の霊場寺院あるいは庶民信仰寺院としての性格をもったのは、近世以降である。

そのうち前者について、伝承によれば釈迦院は安永年間に、真田山観智院[27]在住の月海上人によって開かれた「津国八十八ヶ所霊場」の一つであったといわれ、[28]同霊場の巡礼・巡拝は殷賑を極めていた。当時の様相については不明であり、いま明らかにすることはできないが、大坂では宝暦三年に始まった「弘法大師二十壱ヶ所」霊場の場合、正月五日から二月七日、三月四日、四月五日、五月十一日、六月十一日、七月廿四日、八月十日、九月八日、十月十五日、十一月六日、十二月十三日を「大師功徳参詣日」[29]と定めていた。そして「三年三月」の間一日も欠かさず参詣する人は、「何事も心のままに叶わずということなし」と記して、諸願成就を達成することができるという信仰があった。[30]したがって、このような弘法大師信仰と同様な庶民信仰が、先記の津国八十八ヶ所霊場を巡拝する庶民にも期待されていたのであろう。

しかし同霊場は、そののち戦中戦後の荒廃を経て、昭和五十二年一月、六大院（現第十四番霊場）前住職の呼びかけにより、大阪市内四十一ヶ所札所が結集して、ふたたび摂津国八十八ヶ所大阪市霊場会を発足させた。そして同五十五年にその第一歩を踏み出したのである。

この新しい摂津国八十八ヶ所霊場とその信仰習俗については、かつて筆者も若干報告[31]したことがあり、いまはふれないが、その特徴は弘法大師に結縁して治病や厄難除け、諸願成就の現世利益をもとめる大阪都市民の巡礼・巡拝の信仰の一面を表出していた。この庶民信仰としての弘法大師信仰をもとめる都市大阪および周辺部の人々の信仰は、同札所霊場である釈迦院や一乗院においても見出すことができる。また釈迦院では本堂前に設けられた修行大師のお砂踏みに、各霊場を巡る巡拝者が踏むと災厄消除になり、さらに四国八十八ヶ札所を巡ったとおなじ功徳があるという信仰が強い。これはもちろん同札所霊場（遍路）を巡った先人の苦行の道を踏むという宗教的意味[32]であり、四国八十八ヶ所札所を巡る行道信仰と弘法大師信仰の一表出である。

いま一つ釈迦院の庶民信仰を考察するうえで注目されるのは、厄神殿に祀られている厄神明王に対する信仰である。尊鉢厄神と俗称される厄神は、同寺の年中行事である一月十八・十九日の両日に行われる「厄除開運厄神大祭」には、約一万人の参詣者で賑っている。この厄神明王とは愛染明王を指し、つぎに述べる八幡神と延命地蔵の三体を併祀しているところに特徴がある。すなわち密教的明王信仰の一つである愛染明王と八幡信仰および地蔵信仰が習合してお

り、大変興味ぶかい。

その由来について、釈迦院の伝承では、前節でのべた若王寺の境内に八幡宮[33]があり、豊臣秀吉は朝鮮の役に際して、北の政所が戦勝祈願をこめられ、同寺に縁起一巻を奉納したと伝えている。その後約七十年ほど前に、釈迦院の前住職快浄法印が四十二歳の厄年のとき、能勢の切畑（現大阪府豊能郡豊能村）の廃寺（不明）から延命地蔵を勧請して前記の八幡神と愛染明王とともに八幡宮に奉祀し、厄神明王として祭神[34]にしたという。このうち八幡神は衣冠束帯姿の座った、高さ約三〇センチメートルの神像である。

周知のように、現在畿内において厄神信仰で著名な霊場は、おなじ摂津国八十八ヶ所霊場の第七十六番札所である松泰山東光寺[35]である。東光寺は別称「門戸（もんど）厄神」といわれ、同寺の厄神堂には厄神明王である「両頭愛染明王[36]」―左不動明王・右愛染明王の和合一体尊―が尊像として安置されている。この厄神明王（両頭愛染明王）は日本三体厄神明王の一体といわれ、その由来について、東光寺では弘法大師空海が嵯峨天皇の勅命により三体の愛染明王をつくり、一体を男山八幡宮（現京都府・石清水八幡宮）に、一体を高野山天野明神（現和歌山県）に、そしてもう一体を東光寺におさめたと伝えている。愛染明王は、周知のように空海請来といわれ、円仁請来という不動明王と合体した両頭愛染明王ができるが、この両頭愛染明王図としては、現在高野山金剛峯寺蔵の一幅がよく知られている。鎌倉時代後期の作品（重文）であるが、東光寺の両頭愛染明王（厄神明王）像は、もちろん平安時代まで遡るものではない。同寺は近世初期の寛文三年に、宥盛法印によって再興された[37]というから、このころから本尊薬師如来とは別に、境内仏堂の一つである厄神堂の両頭愛染明王に対する信仰が漸時広まったものであろう。その背景には寺院側の布教があり、他方、厄神信仰を受容する近世都市の民衆にとっては、厄神の流行神的性格[38]を背景に、個人祈願にもとづく庶民信仰が指摘できるように思われる。

一方、釈迦院の厄神明王については、前述したように寺鎮守である八幡神との習合がうかがわれ、諸厄消除の厄神信仰と八幡信仰の一面を表出している。八幡信仰が厄除け信仰と深い関係にあることは、すでに先学の指摘するところである。[39]その一例である石清水八幡宮のほか、各地域の八幡神社で正月十九日に厄除八幡・厄神祭が行われ、この日に厄年の人々が厄除祈願に参詣する事例は多い。

そのうち石清水八幡宮の厄神祭について、『都名所図会』（安永九年）巻五の「疫尽堂」の項に、「一鳥居の南廊下の

内にあり。此所八幡宮御旅所也。疫神ハ正月十九日一日勧請也。延喜式に曰、山城と摂津の堺（マヽ）に疫神を祭るとあり。世人正月十五日より十九日まで当山へ群参して其年の疫難を払うなり。土産に蘇民将来の札、目釘竹、破魔弓、毛鑓等を求めて家に収め、邪気を退くなり」とある。また『山州名跡志』（正徳元年）にも、「八幡御旅所在右鳥居内。（中略）此所は、八幡御神事・放生会等に神輿遷幸の所也。毎歳正月十九日、此所に疫神を祭る也。諸方の男女群詣す」云々とみえて、近世中期ころには正月十九日に石清水八幡宮の疫神堂に群参し、疫難（厄除け）を祈願した民衆の様相が知られる。しかし『男山考古録』[41]の「疫神殿」の項によると、「里俗今頓宮と称す。又疫神ともいふ、古毎歳正月十八日、当頓宮の前庭に於斎場を設けて神事を行う、道饗祭ともいふ」とあり、近世以前には道饗祭として行われていた。さらに同書は続けて「旧式頓宮前にて毎正月十九日、四方に忌竹を建、注連引廻らし、内に榊もて八重垣を造り神を勧請し、社務祀官連坐、神主祭主を勤、官幣私幣神供を奉り、祭式畢て八重垣を撤却して、夫より心経会を勤む」とあり、それは天下疫病流行のとき、空海が般若心経の秘鍵を講じた例に倣って心経会を行ったとある。すなわち厄神会は、本来青山祭（疫神祭）として正月十八、十九日に御霊や疫神を収容し「封鎖鎮魂」[41]したもので、そのための仮屋が八重垣（青山）であり、その儀式が頓宮の儀ではなかったかと推測される。しかし鎌倉時代には心経会、すなわち「以分法味於疫神、以祈息災於経王者也」（『八幡宮寺年中讃記』）[42]と記されたように、心経会は「救疾疫と息災」を祈る内容であった。そして室町期には心経会が疫神祭から厄神祭として貴族層に理解され、厄難除けの宗教的意味をもって受容されていたことは、多くの記録や日記[43]にみえている、たとえば『師守記』[44]貞治七年正月十九日条に、「今日厄神会也、諸人参詣」云々とあり、また『看聞御記』[45]応永三十年正月条にも、「十九日慶寿丸役神参」とみえ、『満済准后日記』[46]応永三十三年正月条に、「十九日。晴。八幡心経会厄神在之」などと記されていた。

当時、貴族が石清水八幡宮の厄神会に参詣したのは、「諸人参詣」（『師守記』）とあるように、庶民の物詣でを貴族が真似て、霊験の著しい同社へ詣でたのである。したがってその信仰習俗も、天皇が厄歳にあたると、代って臣下が息災を祈ったり、貴族の厄除け・厄落しが中心であった。[47]そこには厄除けのために「年令の数だけの銭を供える」習俗のあったことが、『建内記』[48]にみえている。こうした信仰習俗が近世には個人祈願の発達にともなってより一般化し、

既述した『都名所図会』や『山州名跡志』にみられる様相を呈したのである。しかも除厄攘災が八幡神の主な職能として考えられ、その中心的地位を石清水八幡宮が占めるようになったものと思われる。

四

以上のように考えると、既述したように、若王寺釈迦院が八幡宮（現厄神殿）に八幡神と愛染明王、延命地蔵を併祀し、さらに正月十八・十九日の「初厄神」の日に「厄除開運」「息災延命」の大祭を執り行っているのは、歴史的、宗教的に理由のあることであった。すなわち、それは中世以来、石清水八幡宮などで修されていた心経会あるいは厄神会の系譜に繋がる内容をもっていた。それはまた、厄神信仰を媒介とする八幡信仰の庶民信仰的側面を示すものであろう。

もっとも、そこには釈迦院特有の内容もみられる。それは一月十八・十九の両日に執り行われる厄除けの修法を「八幡神供式第」[49]で行っていることである。こうした修法を釈迦院の場合、どうして行っているのかは明確にできないが、この「八幡神供式第」に則って修法を行うことにより長福となり、それが厄除けに転化されているのである。あわせて参詣者は延命地蔵にも厄除開運・息災延命を祈願し、具体的には一月十八日と十九日に灯籠を寄進する人々が多い。

すでに述べたように、この延命地蔵は釈迦院前住職が四十二歳の本厄のとき勧請してきたというのは、弘法大師空海がおなじ四十二歳のとき、自画像や本尊をつくったという伝承[50]があることと無関係ではないであろう。それが真言宗派の伝統なのか、あるいは民俗信仰にもとづくものかは、にわかに解決し得ない問題である。厄年の思想はすでに大陸にあったといわれるが、[51]その「陰陽道的起源」については必ずしも明確ではない。それに対してわが国では陰陽師や修験者が厄年を盛んに言い出し、[52]民間に弘めたとされる。しかし宮田登氏が指摘されたごとく、[53]かれら宗教者が根拠とした『霊枢陰陽記』には、「大忌」として「七歳、十六歳、三十四歳、四十三歳、五十二歳、六十一歳」をあげているが、ここには、とくに男四十二歳（女三十三歳）の大厄の記載はみられない。しかしながら既述した中世後期の室町時代に、貴族は四十二歳の厄除けに厄神詣りをしていたことが、『御湯殿の上の日記』や『実隆公記』などの日記類[54]に散見している。

そうすると四十二歳を男の大厄とする思想は、少くともこのころには貴族や庶民層の間で生じていたといえよう。

そして近世には、男四十二歳（女三十三歳）の大厄をはじめ、前記『霊枢陰陽記』にみえる厄年の意識が庶民一般にも弘く浸透していたもの[35]と思われる。

そこには除厄攘災を祈願する近世庶民の信仰の一端がうかがわれるが、こうした庶民信仰は近代以後も衰えることなく、物質文明の華やかな今日においても、なお一層多くの都市民に信仰されている。そして厄神明王や延命地蔵に祈願し、除厄攘災・開運・家内安全などの現世利益をもとめるために、都市大阪および周辺部の人々は東光寺や若王寺釈迦院に参詣しているのである。

註

① 富田好久「大阪府池田市鉢塚古墳上の経塚」『史泉』31号　一九六六年。

② 註①。『池田市史』概説篇。

③ 註②。

④ 『大阪府の地名Ⅰ』日本歴史地名大系28　平凡社。

⑤ 大阪府立中之島図書館蔵。註④。

⑥ 註①。

⑦ 『池田市史』史料編（原始・古代・中世）。註①。

⑧⑨ 註①。

⑩ 『日本宗教事典』（「修験道」の項目）弘文堂。宮家準「修験道と仏教」『新版仏教考古学講座』一　雄山閣。

⑪ 註⑩。石田茂作「那智発掘仏教遺物の研究」『帝室博物館学報』五　一九二七年。大場磐雄監修『那智経塚』熊野那智大社　一九七〇年。和歌山県立博物館編『那智経塚』一九八〇年。

⑫ 上野元・巽三郎『熊野新宮経塚の研究』熊野神宝館　一九六三年。

⑬ たとえば鞍馬寺経塚遺跡出土の平安後期の銅宝塔、岡山県の安養寺瓦経塚から出土した平安後期の土製宝塔などがその一例である。その他重松敏美著編『豊前求菩提山修験文化攷』一九六九年。元興寺文化財研究所編『英彦山・求菩提山仏教民俗資料緊急調査報告書』一九七八年。

⑭ 『熊野那智大社文書』第一　六九号。

⑮ 文禄元壬辰年仲春、摂津国豊嶋郡秦上郷尊鉢荘在住の石田重信が記した「石田氏記録」（『池田市史』史料編①所収）に、「明応二癸丑年秋九月、鎮守熊野権現ノ社内ヱ住吉明神・午頭天王・十二宮・穴織明神ノ四座ヲ勧請シ奉リ、一村ノ産土神ト崇。則当家ヲ社司トシテ倶ニ修祭祀畢」とある。これは現五社神社の前身が熊野権現社であり、南北朝時代から室町期には若王寺が熊野権現社の別当寺であったことを示している。

⑯ 前記『米良文書一』の文安四年丁卯十二月十五日の「旦那売券」（二八九号）に、「（上略）尊八之持蓮坊引、旦那小枝殿一族地下共（後略）」（傍点筆者）とみえている。

⑰ 註①。しかし、この時代の写経と埋経の宗教的実践の目的

が滅罪信仰にあることは、すでに五来重氏の指摘がある。

『増補高野聖』一九七五年。註㉑参照。

⑱「笠置寺縁起」『大日本仏教全書』寺誌叢書二。拙稿「笠置山の修験道」『近畿霊山と修験道』所収　山岳宗教史研究叢書11　名著出版　一九七八年。

⑲『続群書類従』雑部。

⑳五来重『修験道入門』角川書店　一九八〇年。同「修験道の諸相」（窟籠り）『アーガマ』31～55号　一九八二～一九八五年。

㉑五来重『石の宗教』角川選書15　一九八八年。

㉒㉓㉔『池田市史』史料編（原始・古代・中世）。

㉕釈迦院文書。題欠の一枚文書で、奥書に「享保二十年乙卯二月上院」とある。

㉖註㉒。

㉗元高津神社の別当寺、現在摂津国八十八ヶ所霊場の第十六番観音寺。

㉘『摂津国八十八ヶ所霊場案内記』古寺顕彰会　一九八二年。釈迦院住職赤松快龍師の御教示による。

㉙明和九年の『大坂寺社順拝記』　大阪府立中之島図書館蔵。

㉚註㉙。また文政・天保ころの成立とされる「摂陽奇観」（『難波叢書』第三所収）によると、宝暦三年に「大坂弘法大師廿一ケ所巡礼初ル」とあり、また「毎月廿一日（中略）三年三月の間参詣すれバ諸願成就するといひ伝ふ」と記している。これは「摂陽奇観」の著者である浜松歌国ほか三人が『大坂寺社順拝記』の記事を参照したとともに、近世後期には弘法大師（空海）の命日である三月二十一日に参詣すれば功徳があり、諸願成就ができるという信仰に変化したことが知られる。

㉛㉜拙稿「都市の薬師信仰―大阪を中心として―」五来重編『薬師信仰』民衆宗教史叢書12　雄山閣出版　一九八六年。

㉝この八幡宮の所在については、釈迦院の近くに「恋の山八幡屋敷」の伝承があり（『大阪府誌』）、現在五社神社裏の鉢塚古墳の入口左に八幡（小祠）が合祀されている。

㉞現在厄神殿には中央に厄神明王、中央左に愛染明王、その右に延命地蔵尊の三体を併祀し、それを「厄神明王」と称している。

㉟現兵庫県西宮市門戸西町。高野山真言宗。

㊱明治十二年調べの「寺院明細帳」（『西宮市史』第七巻、資料編4所収）に、東光寺の「境内仏堂四宇」の一宇として、「除厄堂　本尊両頭愛染」とみえている。

㊲前掲明治十二年調べの「寺院明細帳」。

㊳註㉛参照。宮田登『近世の流行神』　評論社　一九七二年。

㊴管見では井阪康二「石清水八幡宮の厄除け詣り習俗の成立について―『看聞御記』『御湯殿の上の日記』を中心にして―」『御影史学論集』7　一九八二年。のち同著『人生儀礼の諸問題』に収録。名著出版　一九八九年。以下の論考において、八幡神社と厄除け信仰の関係については、右の論文によるところが大きい。

㊵『石清水八幡史料叢書』二。

㊶ 五来重「八幡宮の放生会」『宗教歳時記』角川選書134 一九八二年。

㊷ 同史料は鎌倉時代の文永の頃に書かれ、応永頃に書写されたといわれる（註㊴）。『石清水八幡史料叢書』四。

㊸ 註㊴井阪論文所載「正月十九日の厄神詣りの表」参照。また同氏は、その背景に石清水八幡宮の公文所支配を受け、厄神祭に奉仕していた陰陽師の流れをくむ宿人の伝播を想定されている。

㊹ 『史料纂集』所収。

㊺㊻ 『続群書類従』補遺。

㊼ 註㊴。

㊽ たとえば文安元年正月十九日条に、「八幡厄神会也、進代官秀成雑色也 撫物銭貫求如例 成房 小冠 已下分同進之」（時房五十一歳）とある。註㊴。

㊾ 釈迦院住職赤松快龍師の御教示による。

㊿ 日野西真定「橋と杖と厄落し」『今月の寺』5・6合併号 KK三才ブックス 一九八四年。その一例は『紀伊続風土記』第二輯（伊都郡第九）「慈尊院村」の項に、勝利寺（世尊院）の本尊観音像を「弘法大師四十二歳の厄除の為彫刻する所といふ」とある。

(51) 村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房 一九八一年。

(52)(53) 宮田登『神の民俗誌』 岩波新書97 一九七九年。

(54) 註㊴。なお厄年については、すでに『源氏物語』（若菜の巻）に「今年は女の逃るまじき年と思ひ給へつれば」という表現があったこと。また寛弘四年八月、藤原道長の金峯山詣は四十二歳の厄年にあたり、「そのための除厄攘災の利益を求める」のが「登山の大きな目的であった」と指摘されている（村山修一前掲書）。その他五来重「平安貴族と陰陽道」『平安貴族の生活』 有精堂 一九八五年。

(55) たとえば都市大坂において、観音に厄除けの信仰が著しいことは 小島成元「近世の地蔵信仰—特に京・大坂を中心として—」『尋源』34 一九八三年参照。

付記 本稿を作成する上で釈迦院住職赤松快龍師、五社神社元宮司直原與一氏、池田市立歴史民俗資料館の学芸員田中晋作氏から御教示を賜った。記して謝意を申し上げる次第である。

（本学専任講師 国史学）